日本キリスト教団　久宝教会

2023年2月5日 降誕節第７主日礼拝

メッセージ「聞く耳を持つ」　　水谷憲牧師

聖書 ルカによる福音書 8章4−8節

今日の聖書はみなさんよくご存知の「種をまく人のたとえ」です。これは大変理解しやすい話であるとともに、11節からはちゃんと「種をまく人のたとえの説明」という話がありまして、イエス様がちゃんとこのたとえ話について説明をして下さっていますので、もうあまりわざわざ話すことがないというか、何をこれ以上話そうかと悩むところでもあるんですが、初めにその「たとえの説明」を参照しながら、この話の一般的な解釈を、みなさんと一緒に確認しておきたいと思います。まず、ここで出てくる「種をまく人」というのは神様であり、まかれている種は神様の御言葉であるということ。そして、種がまかれた先は、御言葉を受け止める私たちの心であるということです。道端とは、御言葉を聴いても受け入れない頑なな心を指し、石地（岩の上）とは御言葉を「そうかそうか」と感心して受け入れるけれども、それがその場限りで心に根付くことなく、試練に遭うとその言葉をすっかり忘れてしまったり、「やっぱりそんなこと無理だ、私にはできない」とあきらめたりしてしまう心を指します。そして、茨の中とは、御言葉を受け入れ、努力してそれを守っていこう、そのように歩んでいこうと心では思っていても、やはり日常の様々な悩みや目に見える一時的な楽しみに心奪われて、その歩みからいつの間にか外れ、尻すぼみになってしまうような、雑念が多く誘惑に負けやすい私たちの弱い心を表わしているわけです。それに対してよい土地とは、御言葉を心を開いて受け入れ、努めてそれを守っていく私たちの理想的な心の姿を示しています。こうして考えてみると、「キリスト教なんて」と考える人々の多くは道端の固い土地でありまた岩であると言えますし、このように教会に集って礼拝を守りながら、弱い心と闘いよろよろとした信仰の歩みを進めている私たちの多くは、良い土地でありながらいばらも生えかけているような微妙な土地であるのかもしれません。そのような理解を踏まえたうえで、今日のこの話から私は、2つのことが私たちに語られているように思えます。

一つは、神の言葉という種をまく神様の姿について。この例えに出てくる「種をまく人」は、ゴッホとかミレーの有名な絵画にも見られるような、畑仕事をする農家の人なんでしょうけれども、種の蒔き方が、良く言えば豪快、悪く言えばむちゃくちゃなんですね。非常に効率の悪い種の蒔き方をしているように思えます。蒔き方が下手くそだとか、農業の素人だとかいうレベルちゃうやろ。素人の私たちでさえも、まいた種が効率よく育つようにあらかじめ種を蒔く場所をちゃんと考えて、芽が出る可能性の少ない場所に種をまいたりはしないんじゃないでしょうか。しかしこの農夫はそんなことおかまいなしに、そこが道端であろうが岩の上であろうが茨が生えていようが、種をまいているわけです。非常に無駄が多い。不注意なのか、適当なのか。その結果、せっかくまいた種の多くは成長することなく、人に踏まれたり鳥に食べられたり枯れてしまったりしとるわけです。ちょっと何やってんの、もったいない。道端や石だらけのところに種をまいても芽は出ないでしょ、農業は素人の自分でも、もうちょっとうまいこと種まきできるんちゃうか、と私なんかは思ってしまいます。しかしもしかすると、その非常に要領の悪い種のまき方をする農夫の姿こそ

が、私たちの心がどんな状態であろうと、御言葉という種をあきらめることなく、粘り強く、おしみなくまき続ける神様の姿を示しているのかもしれません。

確かに神の御言葉なんて弱いものなんです。ちょっとした悪条件によってすぐに奪い去られ枯れてしまう種のようなものです。１１節以降の「たとえの説明」にもあるように、道路のような固い心、「えっキリスト教なんて信じてるの？」といったような心には、御言葉の種なんてはね返されてしまいます。岩の上で水気がないという、そんな心には、御言葉はなるほどね、と入り込むものの、その場限りで心に根付くことなく、しばらくするとすっかり忘れられたりしてしまいます。「キリストさんはいいこと言いますねえ。あまり現実的じゃないけど」といった心持ちが、この岩の上のことなのかもしれません。そんな表面的な、人ごとのような受け入れ方では、御言葉の種も根を張ることなんてできないでしょう。そして、茨の生えている心、ここには、御言葉を受け入れ、努力してそれを守っていこう、そのように歩んでいこうという真面目な思いは確かにあるんです。あるものの、しかしちょっとした試練に遭うと、やっぱりそんなこと無理だ、私にはとてもできないとあきらめてしまったり、あるいは日常の様々な目に見える楽しみ・誘惑に邪魔されて御言葉の種が実を結ばなかったりするわけです。「今年こそは聖書を通読する！」とか「毎朝お祈りする」といった決心がなかなか長続きしないとか。このように、神様のまかれたすばらしい御言葉の種も、ちょっとした悪条件にはてんで弱いわけです。

しかし、神様は、だからと言って最初から「こんなとこでは芽は出ないだろう」などと決めつけることなく、たとえ種の大部分がむだになるかもしれなくとも、その中の１つでも芽を出して育ってくれたら、と希望をもって、あえて所かまわず種をまかれる方なのです。もちろん良い土地に落ちて百倍の実を結んだ種もあるのですが、だいたい耕しも手入れもせずに、元から柔らかくて石ころもなく雑草も生えてない、最初から豊かな良い土地なんてそんなにありはしないんですから、ああ私の心は全然いい土地ではないなあ、なんて気に病む必要は全くない。神様は聞く耳のある者には何度でも種をまいて下さる方なんですから、そこがどんなに厳しい土地であろうとも関係ないんです。神様は私たちの心からみ言葉がいつか芽を出して成長することを信じて、種をまいて下さっているのです。神様の私たちに対するそのような忍耐と信頼・希望を、私たちは忘れないでいたいと思います。

さて、もう一つこの箇所が私たちに語っていること。それは、神様の似姿として造られた私たちは、神様によって種まかれた者であると同時に種をまく存在でもある、ということです。私たちも、日常の小さな積み重ね、地道な働きに無力さや疲れを感じることがあるかもしれません。精神障がい者についての啓発活動にしても、なかなか世の中の理解が進んでくれない現実があるし、障害を持つ当事者を何とかして支援しようとするこちらの思いが、当事者になかなか伝わらないことも当たり前に多い。子育てにしても、子どもを一人の立派な人格として扱おうと対話に時間と労力を割くよりも、どなり散らしたり鉄拳で制裁した方が手っ取り早い。「しつけ」などというしょーもない言い訳をしながら、子どもを虐待する大人のなんと多いことか。私自身、その「手っ取り早さ」の誘惑に、何度襲われたことか。その他にも、意見の合わない奴とは話をするのも面倒くさいと思ってしまったりすることも

あります。しかしイエスは、私たちがそのような日常の様々なことに疲れや無力感を覚えるとき、そんなときにこそ、私たちはこの種まきの農夫のようでなくてはならない、と教えるのです。無駄な労力を恐れてはいけない。全部が全部、豊かに実らなかったからといって、決して失望したりしてはいけない。むしろ、芽を出し豊かに実った一部の種、たとえそれが一部の種でしかなかったとしても、でもそこにこそ喜びと希望を見出そう、農夫のそのような心構えを持って毎日を歩んでいこう、とキリストは教えておられるのです。イエスも、効率のよさを重視し、無駄な時間や労力を省こうとする考えをもっていたとするなら、きっとわざわざ私たちの罪の身代わりとなって十字架にかかって死ぬことなんかされなかったでしょう。正しい人のみを天の国に招き入れ、しょーもない罪にまみれた私たちを救うことなんかされなかったでしょう。イエスは、できの悪い弟子たちに不満は感じていたかもしれないけれども、決して失望してしまわずに信頼し続けた。だからこそ、弟子たちはイエスの復活後、鮮やかに生まれ変わったのだし、イエスも十字架につけられた後に復活の栄光に与ることができたのです。最終的に全く徒労に終わってしまうかもしれないと思われたイエスの歩みが、労苦が、無駄に終わることなく大きく用いられたのです。この世界に無駄なものは一つもない。一見無駄に見えるようなものも、それは神の計画の中で必ず報いられる。それはこの分厚い聖書を貫いているメッセージです。無駄を無駄なままに終わらせてしまうかどうかは私たちの姿勢にかかっているわけです。私たちにも、一見まったく無駄に思えたことこそが、あとから考えると実はとても意味のあることだった、あれがあったからこそ今の私があるのだ、などという経験があるはずです。

イエスは最後に「聞く耳のあるものは聞きなさい」と言われました。大声で言われた、と書かれています。イエスの元に集まって来たたくさんの群衆の中には、イエスの言葉を聴いているようであまりちゃんと聴いていないような人もいたのかもしれません。私もいつも生返事ばかりして聞いているようで聞いていない、と妻に怒られます。そんな私みたいな人間がいることも踏まえて、イエスは、「聞く耳のあるものは聞きなさい」と大声でいわれたのです。これは大切な話だぞ、と。では、私たちはどうすれば「聞く耳のある者」になれるのか。私の友人に浄土真宗の僧侶がおるのですが、ある時彼と話をしていて、日蓮正宗の話になりました。日蓮宗系は大体こういうことを言います。世の中には色々な宗教があるが、何でもよいわけではなく、正しい宗教を選ぶことが大切だと。そしてそれは仏教の、日蓮正宗こそがそれなのだ。だから、他の邪悪な宗教の教えに惑わされずに日蓮正宗に入信すれば必ず幸せになると。そして、私たちが他の宗派・他の宗教を信仰するのは謗法（ほうぼう）といって不幸になる道だと断言し、例えば「狐や蛇などの下等な畜生を祀る宗教を信仰すると、私たちの人格や行動・人相までもその動物に似て、人間失格の人生を送ることになるのです」とか、「キリスト教の神様などは人間が頭の中で考え出した架空の神であり、道徳や倫理を取り入れてさも立派そうに見せていても、そんな架空の神を立てる宗教に悩み多き私たちの人生を救える力などなく、むしろそれによって偽善者や二重人格者になってしまうのだ」と、さらには同じ仏教の他宗派についても「あれはどれも、お釈迦様が仏法に対する理解力が

劣っている人々に話された仮の教えでしかなく、それでは功徳がない、つまり救われない」などといって貶めておるわけです。例えば保育園の子どもたちは、誰もが自分のお母さんこそ世界一だと思っているでしょう。でも、だからといって友だちのお母さんが最低な悪い人だとまではきっと思っていない。しかしこの日蓮正宗は、自分の信ずるものが最高だと思うあまりに「お前の母ちゃんでべそ」と言ってしまっているわけです。隣の子のお母さんがどんな人かもよく知りもしないで悪口を言って貶め、自分の母親こそ世界一だと言い張っているようなものです。

そしてそういう日蓮正宗について「どうなん？」と聞いたところ、彼は、それに答える代わりにこんな話を聞かせてくれたわけです。「昔、日蓮宗の若い青年が、日蓮宗こそが正しい教えだと証明するために、ある禅宗のお寺に乗り込んだ。するとそこの年老いた住職は青年を気持ちよく迎え、奥に通して『お茶でも飲みませんか』と誘った。言われるままに奥座敷へ入っていき、お茶を入れてもらっていると、住職がお茶を湯飲みからあふれてもまだ注ぎ続けている。『ご住職、あふれていますよ』と青年が言うと、住職はこう言った。『あなたの心もこれと同じだ』」。つまり、この青年の心はその湯飲みと同じで、中身が自分の思いで一杯で、それ以上は何も入らない、そんな心のまま何を話そうと、彼の心には何も入っていかないであろうと。だから、器を空けて出直しておいでと住職は促したわけです。私たちもその意味では、気をつけねばいけないのかもしれません。私たちも、相手を理解しようとする努力なしに、自分の考えは間違っていない、自分こそが正しいという思い込みや、あいつらは間違っている、あいつらがおかしいという思い込みで心を一杯にしてはいないでしょうか。自分を正当化したいあまりに、他人を口汚く貶めてしまいたがる心を私たちは持ってしまっていないでしょうか。他人の考えをこれ以上受け付けることができないほどに、私たちの心の湯飲みは自分の思いで一杯になっていないでしょうか。聞く耳を持つことができているでしょうか。そういうことを私たちは、日々謙虚に振り返ってみる必要があるのかもしれません。自分を正当化してばかりでなく、受け入れたくない言葉・耳が痛い言葉であっても、それを聞く耳のある心。この世の真理を私たちに知らしめる種はそういう所にこそ芽を出し、100倍もの豊かな実を結ぶのだということを聖書は私たちに教えているわけです。

私たちも、私たちに粘り強く御言葉の種をまき続けておられる神様の思いに応えるために、私たちも謙虚に耳を開いて「聞く耳のある者」になり、「こんなことは無駄だ」という思いと戦ったキリストの足跡をなぞって、あきらめずに種をまき続ける者となっていきたいと思います。私の個人的な思いとしては、精神に障害を持っている人たちには、「私は無駄な人生を送っているのではないか」「何で私がこんな目に」と嘆いたり、その嘆きの中で人生を終わらせてしまいたくなる誘惑におそわれる人、そして人生を自ら閉じてしまった人が多くいます。もちろん精神障がいを持つ人に限りませんが、そんな人たちに「あなたの人生はけっして無駄ではないよ、無駄ではなかったよ」と伝え続けてゆける私になりたい、これからも彼らをはじめとするあらゆる人と共に喜び共に歩んでゆける私でありたいと思っています。そしてそのために、人の話を謙虚に聞くことのできる耳を持つ者となりたいと思っています。